



第20図 伝大仙堂出土軒丸瓦 ▲



第21図 第5号地点B地区全景 ▶

ほうがより妥当であろう。奈良時代の瓦が混在する意義に関しては、奈良山一帯に、奈良時代の多数の窯跡が存在すること、奈良時代寺院の立地としてはやや一般性を欠くことからして、付近に窯跡の存在する可能性を考えることができる。

II-7 第17号地点の調査

奈良山丘陵の東北端に位置し、南から北へ突き出た丘陵の西側斜面にあたる。この斜面の裾に、幅3m、長さ34mの東西トレンチを設けて調査をおこなった。その結果、近年の耕作にかかる数条の溝と、地山を削平した段が認められただけで、遺物も中世以降の土器、瓦類が若干出土したにすぎなかった。

II-8 第19号地点の調査

奈良山丘陵の東南端に位置し、丘陵の南側斜面約2700㎡の地域にわたって、150ヶ所ばかりの試掘坑を穿って、調査をおこなった。地表より50cm～70cmで、灰白色の地山粘土に達した。調査区中央部の黄褐色の山砂層中で、奈良時代の土馬の足2点と土器片数点が出土したのみで、遺構は認められなかった。

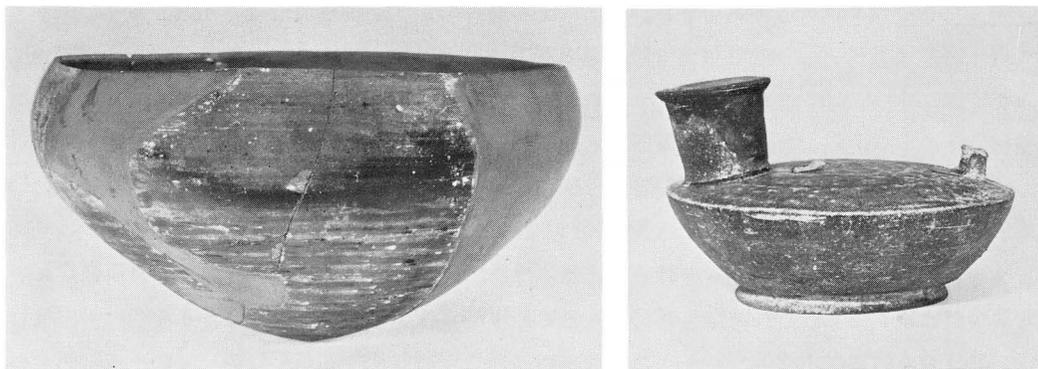
III む す び

平城宮の造営に際しては、我々の想像を越える多量の屋瓦を必要とした。そのほとんどは、平城京の北方につらなる奈良山丘陵一帯で製作され、そこから宮へ供給されていたと考えられる。しかし、奈良山丘陵に存在するこれらの瓦窯については、その分布状況や構造、さらに製作瓦の種類など、最近までほとんど知られないままであった。1970年におこなった第8号地点の山陵瓦窯の調査や、1972年に実施した今回の予備調査（押熊瓦窯群・歌姫西瓦窯群）は、平城宮瓦窯についての従来の空白を埋めるという意味で、非常に大きな成果をあげたものといえる。さらに、

これらに加えて、奈良国立文化財研究所が1972年初夏に調査した奈良市中山町に所在する中山瓦窯の発掘成果と考えあわせると、平城宮造営に伴う瓦窯の変遷を、おおよそながらもあとづけることができるようになった。これら一連の瓦窯の調査によって出土した軒瓦から、各瓦窯群の時期とその動態を明らかにすることができる。これによると、中山瓦窯が最も古く、当初の平城宮造営に関わりをもっていたことがわかる。次いで、歌姫西瓦窯が造られ、これにやや遅れて山陵瓦窯、押熊瓦窯が造られたと考えられる。さらに、従来知られていた音如ヶ谷瓦窯や歌姫瓦窯は、今回調査した一連の瓦窯よりも若干時期の下がるものであり、こうして奈良山丘陵上に点在する瓦窯の変遷があとづけられよう。また瓦窯の構造の点からも、中山瓦窯では登窯と平窯が共存するが、歌姫西瓦窯や押熊瓦窯では、しだいに登窯が少なくなり、平窯が主流を占めるようになる。歌姫西瓦窯や山陵瓦窯にみられる登窯は、その平面が長方形化し、平窯の影響を強く受けていることがわかる。平窯については、中山瓦窯では分焰柱を作らないのがみられるが、歌姫西瓦窯、山陵瓦窯ではすべてに分焰柱が作られている。この分焰柱も、音如ヶ谷瓦窯や歌姫瓦窯の時期になると衰えて、かわりにロストルを持つ瓦窯へと構造が変化してゆく。このような瓦窯の消長や窯体の構造からくる瓦の生産量の変化は、直接平城宮や、京内寺院等の造営にかかわるものであるだけに興味深い、その具体的なあり方は今後の課題である。

歌姫西瓦窯の調査にともなって、瓦窯が造られる以前の7世紀中頃の須恵器窯を検出した。奈良山丘陵に須恵器窯が存在することは、これまで知られていなかった。歌姫地区における須恵器窯の存在は、この地区が窯の操業に適する諸条件をもつことが、すでに7世紀代において知られており、それを前提にこの地域に平城宮の瓦窯が設置されたことを物語るものであろう。

今回の発掘調査により、遺構の遺存状況が予想以上に良好であることが判明したが、ニュータウン造成工事計画のなかで、これら遺跡の積極的な保存措置が立案される必要があるだろう。



第22図 第11・12号地点出土鉄鉢形土器、平瓶